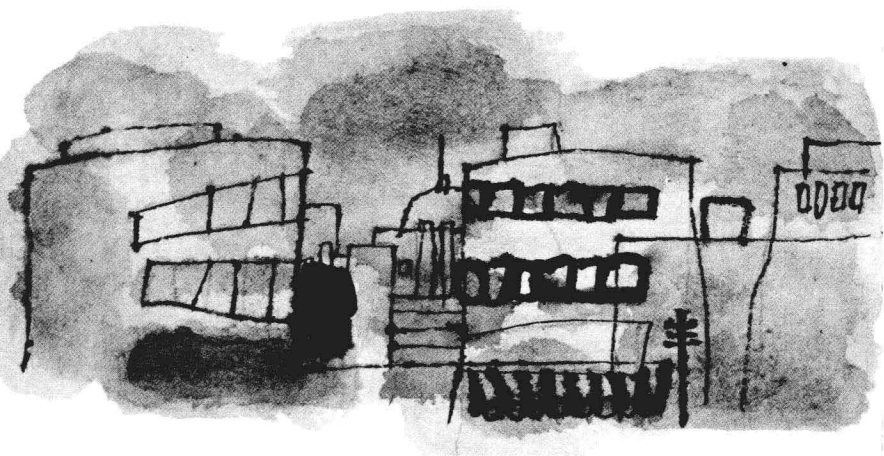


結
大 郎



結太郎

田波靖男



統 太 郎

昭和四十二年九月十五日 印刷
昭和四十二年九月二十五日 発行

△検印省略▽

定価 三七〇円

著 者 田 波 靖 男
発行者 豊 島 澁
印刷者 菅 生 定 祥

発行所

株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

異動の季節

七

ニセモノに注意

二七

かなしきマイ・ホーム

四七

とっても真面目な

七〇

機械と新妻

九五

ある蒸発事件

一二三

やっぱりサラリーマン

一五五

帰って来た日本人

一七二

壺とところの物語

一九二

男なら逞ましく

二二八

未来へ飛び立つ

二六二

挿装
画幀

浜
野
政
雄

長篇小説

続

太

郎

異動の季節

毎年四月になると、世界物産の中堅以下の社員たちは、ソワソワし始める。

二月に前年度の決算があり、三月の株主総会で新年度の役員が確定し、部長級の人事異動が発表され、そして四月末には、課長係長以下の人事が発令されるからである。

それまでに決定した新しい役員、新しい部長連の顔ぶれを見て、社員たちはそれぞれ期待と不安に息をこらすような数週間が続くのである。

新宿の丸富屋という安売り専門のデパートに、世界物産のマークをつけた高級舶来ブラウスが売りに出された事件は、そんな最中の出来事であった。丸富屋は、商品を大量に安く仕入れ、安く売るので、主婦の間には人気のある特売専門のデパートである。

そのガラス窓には、数日前から、

世界物産直輸入 高級舶来ブラウス 大安売り 一着千円

のポスターが、ひととき大きく目立つように貼り出されていた。そのポスターが貼り出されて幾日か経ったある日、一人の主婦が来て、店員をつかまえ、

「誰か、責任者はいないの？ 支配人に会わせてちょうだい」
すごい見目で叫んだ。

店長の森田が応待に出ると、

「舶来高級品だなんて、こんなもの売って。……ひどいじゃないの」
籠からブラウスを出した。

「見てよ。一回洗濯しただけで、こんなにちぢんじゅったのよ」

ブラウスは、主婦の言う通り縮んでいた。

森田は平身低頭、主婦にブラウスに代るものを与えて帰すと、今度は自分が世界物産の繊維課に怒鳴り込んで来た。応待には係長の金原が出た。

「ひどいじゃありませんか。おたくの輸入品だと思うから、信用して千着も仕入れたんですよ」

「確かにうちのマークがついてますが、このブラウスはニセモノですね。どこからお買いになりましたか」

「日本橋の糸山産業です。最初見せてもらったサンプルは、確かにチャンとした、舶来ものだったんで、信用したんですよ」

「糸山産業、そんな代理店とは、うちは取引がありませんよ。お気の毒ですが、世界物産としては、責任をもつわけにはいきませんね」

「そこを、なんとか……」

商売人根性丸出しで、しつこく喰下がる森田に根負けして、金原は、森田を営業統轄部長の早坂のところへ連れて行かざるを得なかった。

金原は、早坂の前に立つと、森田が持って来たブラウスを出して、

「部長……こちらが、さきほど、電話でお話した丸富屋の森田さんです」

「ああ、そう……」

「いかがなものでしょうか。残りのブラウスだけでも、おたくで引取っていただけないでしょうか」

森田は、早速切り出した。金原から、ことのあらましを電話できいていた早坂は、

「虫のいいこと言っちゃ困りますよ。うちの品物を仕入れたかったら、正規のルートを通して下さればよかったんです。我が社としてはどうする事も出来ませんね。にせブラウスってこれですか……こりゃひどいな」

ブラウスを手にして立上った。

「どちらへ」

「業務部長の長谷川さんに、この事を知らせて来る。これは、ちょっとお預りしますよ」

森田に言ってから、金原に向き直り、

「それから、金原君」

「はい」

「あとで、ちょっと話がある。デスクにいてくれよ」

出て行く早坂の後姿を見送って金原は何となくいやな予感がした。

開発課の電話が鳴った。この三月に、結婚するために退社した杉山ひろみに代って、宣伝課から移って来た浜本百合子が電話に出た。

「開発課でございます……はい、かしこまりました」

電話を切つて、大石課長に、

「課長、長谷川部長がお呼びですよ」

「おお、そうか」

席を立つて出て行く。

松原がそれを見ますと、太郎と田子たごに、

「オイ、きみたち、今晚あいてるか」

「麻雀ですか」

「湊みなとの事で、ちょっと相談があるんだ」

「湊さんの」

二人は同時に湊の方を見た。湊は申訳なさそうに、

「最初、半沢さんに相談したんですが、急に九州へ出張されちゃったでしょう」

「それで、あとをぼくが引受けさせられてね」

「相談って何ですか？」

「いや、彼は、前から営業へ移りたがっていたらう。そろそろ定期異動の季節が近づいて来たからね。なんとか、ぼくにも応援して、希望がかなうようにしてやりたいと思うんだ」

「そう言えば、前にそんな事言っていましたね」

「課長にも頼んだことがあるんだらう」

「去年のことですから、覚えてくれているかどうか……と言つて、ここへ来て、念押しするのちよつと……」

「気が弱いなあ」

「いや自分の事となると、なかなか言えないもんだよ。そこでどうしたらいいか、千代の家あたりで相談したいんだけどな」

「いいですよ」

「すみません。今夜は、ぼくが持ちますよ」

「まア、そんなことは気にするな。お互にシアワセになればいいんだから」

再び電話が鳴った。

「開発課でございます……あ、課長ですか、かしこまりました」

電話に出た百合子が受話器を置くと、

「大文字さん、課長からですけどね、すぐに長谷川部長のところに来て下さいって」

「そう。ありがとう」

席を立つのへ、松原が念を押した。

「あ、きみ。今のこと、課長には内証にしといてくれよ」

「ええ」

太郎が部長室に入つて行くと、長谷川と大石が、テーブルの上のブラウスを間に、額を寄せていた。

「ごめんなさい」

「やあやあ、又ひとつ、きみに頼みたい事があつてね」

「はあ」

「実は、困った問題が起きてねえ」

「なんでしよう」

「これなんだよ」

テーブルの上から、さつき早坂に持込まれたブラウスをつまみ上げた。

「これは、うちで輸入している舶来もののブラウスですね」

「うん。デパートの特選売場や高級洋品店に出してるものだ」

「これがどうかしたんですか？」

「これがニセモノなんだ。国産の粗悪品でね」

「ええっ」

「仕入れ業者からクレームが来て、気がついたんだけど、うちの品物として、売り歩いた悪い奴がいるらしいんだ」

「へーえ、でも、よく専門の業者が^{だま}欺されたもんですね」

「サンプルに見せられたのは本物らしいんだ。それに、買った業者も、うちのおとくいさんじゃないんだ。只、いいものを安く仕入れられるって欲にかられて、引受けてしまったらしいんだな。買ったお客さんから、洗濯したらちぢんでしまったとか、すぐ糸がほころびたとか、文句を言われて、

あわてて尻をこっちに持込んだんだ」

「それじゃ、自業自得じゃありませんか」

「その通りなんだ。しかし、うちのマークをつけた粗悪品が出廻っているのを放っておけないからね。どういうルートで、どのくらいの量が出ているか、調査して貰いたいんだ」

「はア」

ブラウスを手に考え込んでいると、大石が一言つけ足した。

「難しい仕事だと思うけどね、きみを部長に推薦したのは、このぼくなんだから、しっかりやってくれよ」

「かしこまりました」

秘書課の太田明子が書類を手に入ってきた。

「ごめんなさい……部長、この書類、判をつけ落とされたところがございましたので、お改めいただきたいんですが」

「そうか。すまなかったね」

書類を受取って見直す。それを待つ明子は、花柄の美しいブラウスを着ていた。

太郎は、いきなり、明子に近づいて、着ているブラウスにさわった。

「何、なさるの？」

「こりゃ、本物の舶来なんだろうな」

「失礼ね。会社の繊維課の金原さんから、割引きで売って貰ったのよ」

「なんだ。あいつ、そんなことして、女の子の御機嫌とってるのか。仕様がないうだな」

大石が言った。

「御存知なんですか」

「うん。ばくの大学の後輩でね。もう、課長になってもいい年なんだけど、まだ係長なんだ。係長じゃ、一番古手じゃないかな」

早坂は、にせブラウスの件を業務部長にまかせると、金原を誘って、会社のビルの地下にあるコーヒー・ショップに行った。大石に言われるまでもなく、早坂は金原の上司として、今度こそ、彼を課長にしてやろうと思っていた。

「きみに話っているのは、他でもない。今度の人事異動で、きみに課長になってもらおうと思っ
ね」

「え、そうですか……」

「但し、九州支店に行ってもらう事になるんだ」

「九州ですって」

「うん……なんだ、そんなにガツカリした顔すんなよ。不服なのか」

「はア、いえ、いえ」

「不服だと言っても、今度の事は、重役もそのつもりでいるから、まず変更は認められないと思うんだ。今から、そのつもりで、準備をしておいてくれ」

「はア……」